

大中華文庫

漢日對照



大中華文庫

漢日對照

紅樓夢

紅樓夢

IV

大中华文库

汉日对照

大中華文庫

漢日対照

红楼梦

紅樓夢

IV



曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 译

曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 訳

人民文学出版社

人民文学出版社



国家出版基金项目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

大 中 华 文 库

大 中 華 文 庫



1906

第四十九回

琉璃世界白雪红梅 脂粉香娃割腥啖膻

话说香菱见众人正在说笑，他便迎上去，笑道：“你们看这首。若使得，我便还学；若还不好，我就死了这作诗的心了。”说着，把诗递与黛玉及众人看时，只见写道是：

“精华欲掩料应难，影自娟娟魄自寒。
一片砧敲千里白，半轮鸡唱五更残。
绿簾江上秋闻笛，红袖楼头夜倚栏。
博得嫦娥应借问，何缘不使永团圆。”

众人看了，笑道：“这首不但好，而且新巧有趣。可知俗语说：‘天下无难事，只怕有心人。’社里一定请你了。”香菱听了，心下不信，料着他们是哄自己的话，还只管问黛玉宝钗等。



1907

第四十九回

琉璃世界 梅は紅く雪に映ゆること
脂粉香娃 脛を割き臄を啖ろうこと

さて、香菱は一同がおしゃべりしているのを見ると、自分からつかつかと寄って行って、にこやかに声をかけ、

「みなさま、こんどの一首をごらん願います。これでもよいとあらば、わたくし、なお勉強を続けます。やはり代わり映えがしないと仰せなら、もうこれを限りに詩を作ろうなどという気は金輪際起こしませんから」

そう前置きして、黛玉をはじめ一同に廻して見せるのですが、したためてあったその詩とは――

その光は さえざえと くまなく照らす
美しき 影や 寒きそが魄
望月は 千里にあかく 砧打ちつつ
半月に 五更も尽きて 鶏鳴きぬ
緑簑着けし 秋の江に 笛の音冴えて
紅袖かえし 高楼の 欄に倚れる
おりあらば 月の嫦娥に 聞かまほし
なにゆえに 永久に円きを えしめずやと

一同は読み終わると、笑いながら、

「この詩なら、出来もわるくないばかりか、技巧も新鮮でおもしろうございますね。諺にいう『天下に難事なし、ただ恐る 有心の人を』とはこのこと。詩社にはどうしてもあなたをお招きしなくては……」

そういわれても香菱は、額面どおり受け取る気になれず、おおかたこの人たちは自分にお世辞をいっているのだらうと、なおも熱心に黛玉や宝釵らの意見をたたこうとします。



正说之间，只见几个小丫头并老婆子忙忙的走来，都笑道：“来了好些姑娘奶奶们，我们都不认得。奶奶姑娘们快认亲去。”李纨笑道：“这是那里的话？你们到底说明白了是谁的亲戚。”那婆子丫头都笑道：“奶奶的两位妹子都来了。还有一位姑娘，说是薛大姑娘的妹妹。还有一位爷，说是薛大爷的兄弟。我这会子请姨太太去呢。奶奶和姑娘们先上去罢。”说着，一径去了。宝钗笑道：“我们薛蝌和他妹妹来了不成？”李纨也笑道：“我们婶子又上京来了不成？他们也不能凑在一处。这可是奇事。”大家纳闷，来至王夫人上房，只见乌压压一地的人。原来邢夫人之兄嫂带了女儿岫烟进京，来投邢夫人的；可巧凤姐之兄王仁也正进京，两亲家一处打帮来了。走至半路泊船时，正遇见李纨之寡婶带着两个女儿——大名李纹，次名李绮——也上京，大家叙起来，又是亲戚，因此三家一路同行；后有薛蟠之从弟薛蝌，因当年他父亲在京时已将胞妹薛宝琴许配都中梅翰林之子为婚，正欲进京发嫁，闻得



1909

そんなはなしをしているうち、そこへいくたりかの侍女見習と老女たちがあたふたやってきて、笑いながら口々に、

「お着きでございますよ、大勢姫さまや奥様がたが……。どなたもわたくしどもの存じ上げないかたばかりで。さ、奥様も姫さまがたも、おはやくご親類に挨拶をなさりにお出ましく下さいまし」

というではありませんか。李紈は笑いながら、

「そんなまた藪から棒に、いったいどなたのご親類だというのよ、はっきりおっしゃい」

こうただしました。老女や侍女たちは笑いながら、

「奥様のお妹さまが二かた揃ってお越しになりました。それからお嬢さまがもう一かた、なんでも薛のお嬢さまの妹御でいらっしゃいますとか。それからもう一かた、これは殿方にて薛のお坊っちゃんまのご舎弟に当たられますおかたもお越しでございます。わたくし、これから薛の叔母さまをお呼びしに廻りますので、奥様は姫さまがたとごいっしょにさきにお越しになってくださいまし」

と言い捨てて、そのまま立ち去りました。宝釵は笑いながら、

「まさか従弟の蝌とあのひとの妹が出てまいったりするわけが?……」

と半信半疑。李紈も笑いながら、

「うちの嬪母がそんなまた上京してまいったりするわけは?……それに、みながいっしょになるとは考えられませんね。不思議なことがあればあるもの……」

誰しも狐につままれたような気持で、奥方の王氏の住まう正房にきてみますと、床にはぎっしりと人垣ができそうなくらい。それというのが、奥方の邢氏の兄嫁が娘の岫烟を連れ奥方を頼って都へ上ろうとしていたところ、ちょうど熙鳳の兄の王仁（第十四回に見えた）も上京するというので、二軒の親戚がいっしょに力になりあってやってきた。すると道中も半分ほどきて船を碇泊させているとき、偶然も偶然、李紈の後家をたてている嬪母が二人の娘——上が李紋、下が李綺といいます——を連れてやはり上京するのに出くわし、いろいろと一同がはなしてみれば、これがまた親戚に当たるという。そんなわけで三軒が道中いっしょにやってきた次第。ところがあとになって、薛蟠の従弟の薛蝌、これがまた以前その父が都にいた時分から、実の妹の宝琴を都の梅翰林（「翰林」は進士に及第して翰林院庶吉士となった人の称）の子息にめあわせ



王仁进京，他也带了妹子随后赶来：所以今日会齐了，来访投各人亲戚。于是大家见礼叙过。贾母王夫人都欢喜非常。贾母因笑道：“怪道昨儿晚上灯花爆了又爆，结了又结，原来应到今日。”一面叙些家常，一面收看带来的礼物，一面命留酒饭。凤姐自不必说，忙上加忙。李纨宝钗自然和婶母姊妹叙离别之情。黛玉见了，先是欢喜，次后想起众人皆有亲眷，独自己孤单无个亲眷，不免又去垂泪。宝玉深知其情，十分劝慰了一番方罢。然后宝玉忙忙来至怡红院中，向袭人、麝月、晴雯等笑道：“你们还不快看人去。谁知宝姐姐的亲哥哥是那个样子，他这叔伯兄弟，形容举止另是一样了，倒像宝姐姐同胞兄弟是的。更奇在你们成日家只说宝姐姐是绝色的人物，你们如今瞧瞧他这妹子，还有大嫂子这两个妹子，我竟形容不出了。老天，老天，你有多少精华灵秀，生出这些人上之人



る約束ができていましたので、都へ上って妹を嫁づける腹でいたところ、王仁が上京するよし聞きこんだものですから、彼も妹を連れてあと追ってきました。それで今日はみなが落ち合ったかつこうで、それぞれの親戚を頼ってきたわけでした。

さてそこで一同たがいに挨拶を済ませます。賈の後室や奥方の王氏らは、いずれも大層な喜びよう。後室はにこにこして、

「道理でな、昨夜は丁字頭（灯心の燃えさしのでつぺんにできる塊り）がはぜたかと思うとまたはぜる。結んだかと思うとまた結んだが（俗信で縁起がよいとする。第二十八回にも見えた）、なんとあれば、今日のこの前触れだったのだね」

などといい、あれこれ四方山話をしたり、持参の進物を納めてながめたり、酒食の用意を言いつけたりします。熙鳳は、そうでなくとも忙しいところへ、一段とまた忙しさが加わったかつこうでしたが、それはいうまでもなし。李紈や宝釵は、無論それぞれ嫡母や従姉妹たちと、別れていたあいだのあれこれを語り合います。黛玉はこの人たちと対面してはじめこそ喜んでいたものの、あとになって、一同みな親戚があるのに、自分だけはひとりばっちの寄るべもない身の上なのだと、そう思うにつけてもついても涙せずにはいられません。宝玉はその心持を深く察し、ことばを尽くしてこれを慰めてやり、それでようやくにおさまりました。

さてそれから宝玉は、大いそぎで怡紅院へ立ちもどり、襲人や麝月・晴雯らに向かって、ほくほく顔でこういうのでした。

「さあ、さ、おまえたち、はやく見にいったおいで。いや、思いもかけなかった、宝釵姉さんの実の兄さんときては知つてのとおりの様子だろ。ところがあの従弟さんという人は、なりといいふりといい、まるで似ても似つかず、あちらの方が宝釵姉さんの実の弟さんみたいなのだから恐れ入るな。

それよりもっと不思議ともなんともいいようのないことがあるのだよ。おまえたち、いつも宝釵姉さんだけが絶世の美人だみたいなことをいっているが、まあこれからひとつ、あちらのそのお妹さんというのを実見に及ぶことさ。それから上のお嫂さん（李紈）のあの二人のお妹さんもいらっしゃるが、わたしには形容もなにもできたものではない。

ああ、天よ、天よ。いったいあなたはいかばかり精華・靈秀をお持ちになったればこそ、これら『人の上なる人』を生み出すことがおでき



来！可知我井底之蛙，成日家只说现在的这几个人是有一无二的，谁知不必远寻，就是本地风光，一个赛似一个。如今我又长了一层学问了。除了这几个，难道还有几个不成？”一面自笑自叹。袭人见他又有了魔意，便不肯去瞧。晴雯等早去瞧了一遍回来，吹吹的笑向袭人道：“你快瞧瞧去。大太太的一个侄女儿，宝姑娘一个妹妹，大奶奶两个妹妹，倒像一把子四根水葱儿。”一语未了，只见探春也笑着进来找宝玉，因说道：

“咱们的诗社可兴旺了。”宝玉笑道：“正是呢，这是你一高兴起诗社，所以鬼使神差来了这些人。——但只一件，不知他们可学过作诗不曾？”探春道：“我才都问了问他们，虽是他们自谦，看其光景没有不会的。便是不会，也没难处。你看香菱就知道了。”袭人笑道：“他们说薛大姑娘的妹妹更好，三姑娘看着怎么样？”探春道：“果然的话。据我看，连他姐姐



1913

になったのでしょうか！いまさらながら、このわたしは井のなかの蛙だったと知らされた。いつもいつも身近のあのいくたりかの人たちだけを唯一無二のものと思いこんでいたのに、あにはからんや、なにも遠方まで出かけるまでもなく、ちゃんとこのお膝元でどれをとっても目うつりするほどの人たちと巡り会えたのだからな。いまこうして、わたしはまたひとつ利口になった。あのいくたりかの人たち以外に、まさかまだいくたりかいらっしゃろうとは思ひもよらなかったことだからね」

といいつつも、ひとり悦に入っては感に堪えぬ態でいるのでした。

襲人は宝玉にまたしても憑かれたような様子があらわれていますので、どうしても見にゆこうとはしません。晴雯らははやくも見てもどり、「クスクス」と笑いながら襲人にいいました。

「あなたもはやくおがみにいっていらっしゃいな。上の奥方さま（邢氏）の姪御さま、宝釵さまの妹御さま、それから上の若奥様（李纨）の妹御さまお二人、まずそれこそ一からげにした四本の行者にんにく（第四十六回前出）みたいにお立派ですから」

と、そのことばも終わらないうちに、そこへ探春までがにこにこしながらはいってきて、宝玉をつかまえるなり、

「さあ、これでわたくしたちの詩社も一段と盛んになりましてよ」

こう言いだしました。宝玉は笑って、

「まったくだね。これというのも、あんたがはずんで詩社をこしらえたものだから、神々のお使いとしてあの人たちがみえたのだよ。——ただ一つ気になるのだが、あの人たちはそもそも詩を作る勉強をしたことがおありだろうか？」

「それでしたらわたくし、さっきみなさんにお聞きしてみました。みなさんどなたも謙遜こそしていらしても、どうやら心得のないかたはいらっしゃらないようにお見受けしました。たとえ心得がおありでないにせよ、別段不都合なことはありませんわ。ほら、香菱さんの例だけでもおわかりでしょう」

と、探春。襲人は笑いながら口をはさみ、

「この人たちは、薛のお嬢さまの妹御がなかでもご立派だなどと申しておりますが、姫さまのごらんあそばしたところでは、いかがなものですか？」

「ええ、ええ、そのとおりですよ。わたしの見るところ、あちらのお姉さま（宝釵）をはじめ、こちらのみなさんのどなたを持ってきて



并这些人，总不及他。”袭人听了，又是诧异，又笑道：“这也奇了。还从那里再好的去呢！我倒要瞧瞧去。”探春道：

“老太太一见了，喜欢的无可不可，已经逼着太太认了干女儿了，老太太要养活，才刚已经定了。”宝玉喜的忙问：“这果然的？”探春道：“我几时说过谎！”又笑道：“有了这个好孙女儿，就忘了你这孙子了。”宝玉笑道：“这倒不妨，原该多疼女儿些才是正理。明儿十六，咱们可该起社了。”探春道：“林丫头刚起来了，二姐姐又病了，终是七上八下的。”宝玉道：“二姐姐又不大作诗，没有他又何妨。”探春道：

“越性等几天，等他们新来的混熟了，咱们邀上他们岂不好。这会子，大嫂子宝姐姐心里自然没有诗兴的；况且湘云没来，颦儿才好了，人人不合式。不如等着云丫头来了，这几个新的



も、まず及びますまいね」

襲人はこれ聞いて、そんなことがとも思い、また笑いながら、

「これはまた異なことを伺うもので。あのかたがたよりももっとご立派なかただとなると、想像もつきかねます。わたくしもこの目で拝見してみとうございますわ」

すると探春が、

「実はお祖母さまも一目ごらんになるなり、申し分なくお気に召したご様子で、ご自分のお声がかりでもって奥方さま（王氏）にぜひにとおっしゃり、奥方さまの義女におさせになりましたの。そしてお祖母さまがご自分のおひざもとで子育てなさることに、さっきもう決まったのですから」

というではありませんか。宝玉はうれしくてならず、忙きこんでたずねました。

「それ、本当なの？」

「まあ、わたくしがいつ嘘などついたことがございまして？」

探春はそういうと、また笑いながら、

「あんなすてきなお孫娘さんがおできになったもので、もうもうあなたというお孫さんなどお見限りのようでいらっしゃいますわね」

と冷やかします。宝玉は笑って、

「なあに、そんなこといっこう構わぬ。だいたいが女の子をひいきしてお可愛がりになって、あたりまえなのだから……。それよりこの十六日にはわたしたち、詩社の集まりをしなくてはね」

「でも、黛玉さんはやっと床あげなさったばかり、それにこんどは迎春姉さまがご病気ときています。これではどうにも足並みが揃いませんわね」

「迎春姉さんなら、詩はそう得手ではないし、あちらが欠けたところで、別段差しつかえはないさ」

「でも、いっそのこと四、五日見送って、あの新顔のみなさんがどうやらなじまれたところで、わたくしたち、お迎えするとした方がよくはございませんこと？ いまですと、上のお嫂さま（李纨）や宝釵姉さまも、どうてい詩など作ろうという気持のうえのゆとりはおありでないと思います。おまけに湘雲ちゃんは屋敷にみえておりませんし、顰ちゃんはお好くなられたばかり、みなそれぞれ都合がよくありませんわ。それより湘雲ちゃんもみえ、こんどの新顔のかたたちもこちらになじまれ、顰



也熟了，颦儿也大好了，大嫂子和宝姐姐心也闲了，香菱诗也长进了：如此邀一满社岂不好。咱们两个如今且往老太太那里去听听，除宝姐姐的妹妹不算外，他一定是在咱们家住定了的；倘或那三个要不在咱们这里住，咱们央告着老太太留下他们，也在园子里住下，岂不多添几个人，越发有趣了。”宝玉听了，喜的眉开眼笑，忙说道：“倒是你明白，我终久是个糊涂心肠，空喜欢一会子，却想不到这上头来。”说着，兄妹两个一齐往贾母处来。果然王夫人已认了宝琴作干女儿，贾母欢喜非常，连园中也不命住，晚上跟着贾母一处安寝。薛蝌自向薛蟠书房中住下。贾母便和邢夫人说：“你侄女儿也不必家去了，园子里住几天逛逛再去。”邢夫人兄嫂家中原艰难，这一上京，原仗的是邢夫人与他们治房舍，帮盘缠，听如此说岂不愿意。邢夫人便将岫烟交与凤姐。凤姐筹算得园中姊妹多，性情不一，且又不便另设一处，莫若送到迎春一处去，倘日后邢岫烟有些不遂意的事，纵然邢夫人知道了，与自己无干。从此



ちゃんもすっかり好くなられ、上のお嫂さまや宝釵姉さまがたも気持ちにゆとりがおできになり、香菱さんの詩も手腕が上がり……と、そんな時期をみて、社中のどなたも洩れなくお招びするようにしました方が、よくはございませんかしら？ねえ、わたくしたち二人してこれからひとまずお祖母さまのところへ上がって、聞き合わせてみましょうよ。宝釵姉さまのお妹さんは勘定外として——あのかたはこちらに当分ご滞在と決まったのですからね——もしもあとのお三人がこちらには滞在なさらぬということでしたら、わたくしたちからお祖母さまにお引き留めくださるようお願いいたすのですわ。あのかたたちも園に滞在なさるとなれば、顔ぶれも賑やかになるわけで、なおさらおもしろ味も増そうというものではありませんか？」

と、探春。宝玉はこの提案を聞いて、すっかりうれしくなり、眉は開き目もとまで笑ってみえるほど。そこでせかせかと、

「へえ、あんたというひとでも知恵者だなあ。わたしなど、いつまでたっても抜け作だよ。むやみとうれしがっているばかりで、そこまでは気がつかなかったね」

そういうなり、兄妹二人うち連れて後室の住まいへとやってきました。なるほど探春のことばどおり、奥方の王氏は宝琴を自分の義女にしてい、これには後室もしごくご満悦、園内に住まわせるのも惜しいとて、晩には自分といっしょに寝むことにさせました。また薛蝌は当然薛蟠の書院の方に住まうことになります。後室はそこで奥方の邢氏に向かってこう勧めました。

「あんたの姪も、いますぐ家へゆくには及ぶまい。園で何日か泊まって遊んでからのことにしたらよかろうよ」

いったい奥方の邢氏の兄嫁の家というのは、暮らしむきも楽ではなく、こんどこうして上京できたのも、実は奥方がこの人たちのために住まいを準備してやり、旅費まで助けてやったおかげだとあって、そういう勧めを受けては、否応のあろうわけがなし。奥方はそこで岫烟を熙鳳にあずけました。熙鳳はあれこれ考えてみて、

「園内には姉妹たちも大勢いて、それぞれ気性もちがう。それにまたわざわざ別に一軒都合するのもなんだし、いっそ迎春ちゃんのところへ送り込んで同居させることにすれば、万が一後日、岫烟さんが少々ままならぬ思いをするようなことがあって、よしんばそれが奥方さまに知れたところで、自分には関係ないことだ……」



后，邢岫烟家去住的日期不算，若在大观园住到一个月上，凤姐亦照迎春分例送一分与岫烟。凤姐冷眼战兢岫烟的心性为人竟不像邢夫人及他的父母一样，却是个温厚可疼的人；因此，凤姐反怜他家贫命苦，比别的姊妹们多疼他些，邢夫人倒不大理论了。贾母王夫人因素喜李纨贤惠，且年轻守节，令人敬伏，今见他寡婶来了，便不肯令他外头去住。那李婶虽十分不肯，无奈贾母执意不从，只得带着李纹李绮在稻香村住下了。当下安插既定。谁知保龄侯史鼎，又迁委了外省大员，不日要带了家眷去上任。贾母因舍不得湘云，便留下他了，接到家中。原要命凤姐另设一处与他住，史湘云执意不肯，只要和宝钗一处住，因此也就罢了。此时大观园中，比先更热闹了多少。李纨为首，馀者迎春、探春、惜春、宝钗、黛玉、湘云、李纹、李绮、宝琴、岫烟，再添上凤姐儿和宝玉，一共十三个人。叙起年庚，除李纨年纪最长，这十二个皆不过是十五六七岁，或有这三个同年，或有那五个共岁，或有这两个同月同日，那两个同刻同时，所差者大半是时刻月分而已。连他们自己也不能细细分晰，不过是“姊”“妹”“弟”“兄”四个字随便乱叫。



というので、こののち岫烟が家に泊まりにゆく期間は別として、大観園でひと月以上も過ごすときには、熙鳳の方でも気を利かせ、迎春の手当に準じて、一人前を岫烟にも届けるよう計らいます。して熙鳳が、冷静な目で岫烟の気立てや人柄を観察したところでは、奥方の邢氏や岫烟の両親とは似ても似つかぬ、温厚で人好きのする娘。そんなわけで熙鳳としても、家が貧しくわるい運命の下に生まれてきた岫烟がなんとも不憫でならず、ほかの姉妹にもまして彼女に目をかけてやるのでしたが、逆に奥方の方では岫烟のことなど格別念頭にもないふうでした。

後室や奥方の王氏は、かねてから李纨が賢明で情け深く、若い身空で亡き夫に操を立て、人々の敬愛の的であるのを喜んでいましたが、それだけにいまこうして彼女の寡婦の嫡母がきたのをみると、なんとしてもよそに住まわせることを承知しません。嫡母の李氏の方では、それではあまりに恐縮でというのでしたが、なにせ言い出した後室が頑としてあとへ退きませんので、それほどまでにおっしやってくださいならと、李紋・李綺ともどもに稻香村に滞在することにしました。

こんなぐあいに、ばたばたとそれぞれ落ち着きさきが決まったわけでしたが、はからずも保齡侯史鼐がこのたび地方の大官として転出を命ぜられ、近々のうち家族を帯同のうえ任地に向けて出発する運びとなりました。後室は湘雲と別れたくないばかりに、彼女をあとに残らせて屋敷に引き取りました。それもはじめは熙鳳に命じ別に一軒都合させて住まわせる気でいたところ、当の湘雲がいっかなはいといわず、どうしても宝釵といっしょに暮らしたいとだだをこねましたため、ではそうするさ、と譲らされてしまいました。

かくていまや大観園のうちは、以前にひき比べ、どれだけ賑やかになったことか知れません。李纨をはじめとして、ほかに迎春・探春・惜春・宝釵・黛玉・湘雲・李紋・李綺・宝琴・岫烟、さらに熙鳳と宝玉とを加えると、総勢十三人にものぼります。年齢の点からいえば、李纨が最年長なのは別格として、これら十二人はいずれもたかだか十五、六、七歳といったところで、こちらの三人が同年の生まれなら、そちらの五人は同い年齢、またこちらの二人が同じ月の同じ日に生まれているかと思えば、そちらの二人は同じ時の同じ刻に生まれていたりして、ちがってもまず時刻や月くらいなもの。当人たちにしても、年齢の上下の区別もしかとはつきかねるほどで、ただもう「お姉さま」「妹」「弟」「お兄さま」という四つのことばで呼びあって済ませてしまうのでした。